

# 教育方法としての“実際的な体験”

—— <弦楽器作りと合奏>を中心に ——

広 瀬 綾 子

## 要 旨

本稿は、教育方法としての“実際的な体験”の一つである「弦楽器（バンドーラ）作りと合奏」を取り上げ、この体験活動がどのようなものか、その教育的な意義はいかなるものか、について明らかにする。弦楽器（バンドーラ）作りと合奏の活動の教育的意義として、道具・工具を使ってモノを作る楽しさ、時間をかけ苦労や困難を乗り越えて作品を完成させることによって得る深い達成感や感激、友人との助け合いおよび子どもと教師の厚い信頼関係の構築などを挙げるができる。

キーワード：教育方法、体験活動、楽器作りと合奏

## はじめに

教育方法としての「実際的な体験」は、世界の教育の歴史をみれば分かるように、偉大な教育者あるいはすぐれた学校がその重要性を主張し、また教育実践に積極的に取り入れてきたものである。例えば、あのペスタロッチーは、実際的な活動体験を伴わない、当時の言葉だけの教育方法を批判し、その活動体験の大切さをこう表現した。「実際的な活動が子どもを成長させ、安らぎをもたらす。言葉など捨ててしまえ！」<sup>1</sup>。ルソーもまた、「書物ではなく、事物に即して学ぶ」<sup>2</sup>ことの重要性を訴え、「かれの手足をもちいることが、かれを行動し思考する存在につくりあげた」<sup>3</sup>と述べる。

また 20 世紀の世界の教育界に多大な影響を与え、今日も影響を与え続けているシュタイナー学校は、第 1 学年から実際的な活動を重視する。例えば、1 年生は全員が実際に毛糸を使用して編み物に取り組む。その後、人形作りや実際的な活動をし、帽子をも実際に作る。家を建てる大工仕事にも取組み、中学生になると、一人一人がミシンを使ってブレザーやイブニングドレスを実際に作る。

わが国でも教育方法として、実際的な活動体験を重視した教育者や学校は、戦前も戦後も少なくない。しかし、CD や DVD などの視聴覚機器の使用の日常化、タブレット端末やデジタル教

科書、電子黒板などによる画像や映像の提示といった教育方法の波に押されて、実際の体験という教育方法は、授業の中で著しく後退し、その減少の割合は年々大きくなっている。

とはいえ、実際の体験の重要性への声や主張は大きく、それを重視して行われる教育実践は全国各地に存在する。そのなかには注目すべきものも少なくない。その注目すべき実践の一つとして、子ども一人一人が、厚い木材の板や角材をもとに四弦の弦楽器を、自分の手で長い時間をかけて完成させ、その後はその自作の楽器で合奏するという実際の体験活動を挙げることができる。ここに言う四弦の弦楽器は、ギターを小さくしたような親しみやすい楽器で「バンドーラ」と呼ばれる。

この「バンドーラ作りと合奏」は、1970年代に長野県松本市の公立小学校で始まり、1980年代以降、今日に至るまで県外でも行われるに至っている、実際の体験の重視の考えに基づく注目に値する実践である。この実践は現在、広島、滋賀、岐阜および長野の四つの県で、子どもを対象にした「バンドーラ作りと合奏」の実習会という形で行われている。本稿は、四県のうち、長野県の木祖村で五年前から行われている「バンドーラ作りと合奏」の実習会に注目し、ここで行われるバンドーラ作りと合奏の実際の体験活動が具体的にどのようなものか、その教育的な意義はいかなるものか、を明らかにしようとするものである。まず木祖村での「バンドーラ作りと合奏」の実習会について述べたい。

## I 長野県木祖村「こだまの森」における「バンドーラ制作と合奏」の実習会の概要

### (1) 東日本大震災支援プロジェクトの一環としての「バンドーラ制作と合奏」の実習会

NPO法人「木曾ユネスコ協会」（井原正登理事長）は、東日本大震災支援プロジェクトの一つとして、被災地・福島県の子どもたちを木祖村の「信州やぶはら高原こだまの森」に招待して、ここで4泊5日（2016年8月8日～12日）の「バンドーラ制作と合奏」の実習会を行った。木曾ユネスコ協会のこの活動は、2012年から始まり、今年で5年目を迎える。楽器作りと合奏を通して、被災地の子どもたちを元気づけ、一から楽器を作りみんなで演奏する楽しさを味わってもらいたい、との目的で行われている。今年は、木祖村と友好提携している福島県川俣町の町立山木屋小学校の4年生、5年生、6年生、計15名（全校生徒17名）と引率の教員2名が参加した。筆者もアシスタントとして参加し、随時子どもたちのサポートを行った。山木屋小学校は、福島第一原子力発電所事故の影響で、学区全体が計画的避難区域に指定され、現在も一部は居住制限区域になっている。仮設住宅で暮らす子どももおり、家族が離れ離れの生活を余儀なくされたり、言葉にこそ出さないが、心に傷を抱えた子どもも少なくない。ある5年生の児童は、今春、事故の影響で福島県郡山市に引っ越し、このバンドーラ作りで、3ヶ月ぶりに旧友と再会し「久しぶりに会った友達と一緒に取り組む作業は楽しい」と笑顔を見せた<sup>4</sup>。

## (2) バンドーラ作りを指導する中澤準一

バンドーラ作りと合奏を指導するのは、元小学校教諭の中澤準一である。バンドーラは、ヨーロッパ中世にその源を持つ楽器で、中澤によってバンドーラと命名された。弦は4本、ギターとマンドリンの間のような弦楽器で、本体を自分が好きな形にデザインできるのが特徴である。中澤は長野県内各地の小学校で30年以上にわたって、ツガやアスナロ、ヒノキなど、木曽産の木材をのこぎりやのみなどの工具を使って加工して、楽器を制作し、音楽の時間に自作の楽器で演奏する楽しさを教えてきた。2000年10月には、中日新聞社による「中日教育賞」を受賞している。2002年に発行された、文部科学省編「心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開—小学校—」では、その教育が写真入りで取り上げられ、紹介された<sup>5</sup>。すでに述べたように、全国各地に広がり、今も実践されている教育活動である。

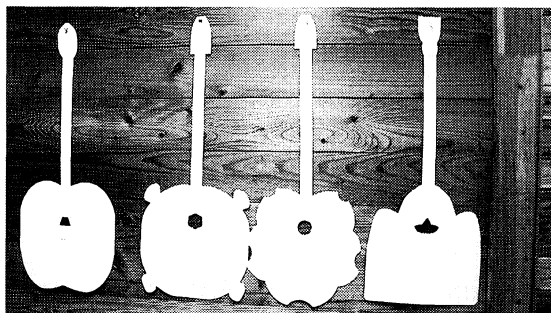
中澤によるバンドーラ作りと合奏の教育実践を支えたのは、彼の次のような子ども観であった。一つ目は、子どもが手足や五感を働かせて、モノを作りたいという欲求をもっている、との見方である。彼は、子どもが、道具で木を切ったり削ったりしながら本格的なモノを作ることに強い興味・関心を示すことに着目した。二つ目は、子どもは音楽や造形など芸術的なものを求めている、との見方である。かれは、子どもの内に、美しい形、美しい色、美しい音色、つまり芸術性豊かな作品や音楽を心から欲していることを見て取ったのである。

## II 子どもたちによるバンドーラ制作

### (1) 初日～デザイン、型紙づくりからさおとヘッドの接合まで～

山木屋小学校の子どもたちは、朝8時に福島を出発し、バスで約8時間かけて15時過ぎに木祖村の「こだまの森」に到着した。中澤は、「バンドーラが他の楽器と違うのは、作る人が自分が考えた形にできることです。楽器作りは大人でも大変。でも一生懸命がんばれば、必ずできる！」と、子どもたちにエールを送った。名古屋芸術大学の学生5人が、子どもたちのサポートをつとめる。

さっそく、デザインを決め型紙づくりに入る(写真①)。本体とヘッド、サウンドホールは自分の好みの形にできる。中澤はデザインを考えるにあたって、「人の真似ではなく、人と違ったもの、自分にしかないのがいい。たとえば、りんごやなしなどの果物の形、飛行機やロケットなど、乗り



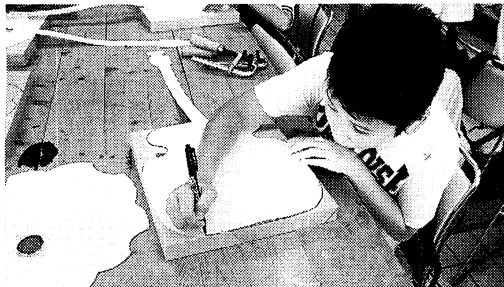
写真① 型紙を作る

物もいいですね」とアドバイスする。ここで大切なことは、板いっぱいの面積を使った形にすることである。面積が大きければ大きいほど、音がよく響くからである。

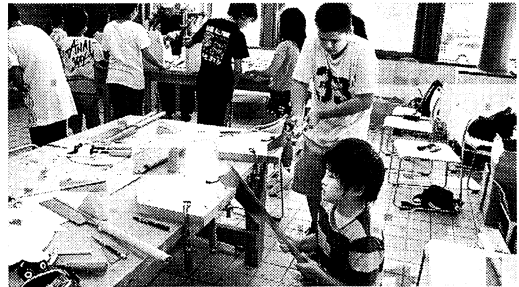
続いて、ヘッドとさおの先端をのこぎりで斜めに切り、ボンドで接合する作業に入る。初日は、こうして、デザインと型紙作り、さおとヘッドの接合まで作業を行った。

## (2) 2日目～様々な工具を使って胴部（本体）を形作る～

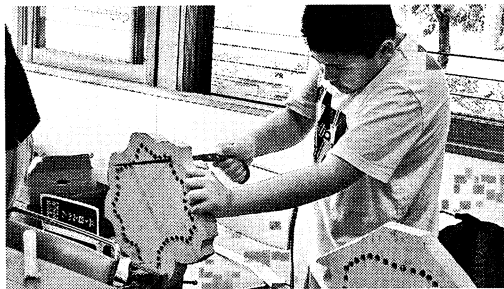
2日目、いよいよ、バンドーラの本体を形作るメインの作業である。前日に作成した型紙を、縦31センチ、横30センチ、厚さ3センチほどの胴板の上に置き、輪郭をサインペンで書く（写真②）。輪郭を取ったら、その輪郭に合わせて胴板をのこぎりで切る作業である（写真③）。細かいカーブは糸のこぎりを使って切る。



写真② 型紙を胴板に置き、輪郭を取る



写真③ 輪郭に沿って、のこぎりで切る



写真④ 「廻しのこぎり」で、穴をつないで中をくり抜く

のこぎりで切ったら、次は胴板の側面をノコヤスリで削って、なめらかにする。なめらかになったら、胴板をくり抜く作業に入る。電動ドリルで穴を開け、曲線部分を切断しやすいように刃が細く短く作られている「廻しのこぎり」で、その穴をつないで中をくり抜く作業である（写真④）。この作業は力と根気がいるため、集中力が途切れて作業の手が止まる子もいる。そ

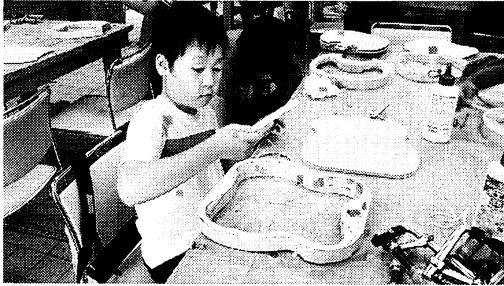
れだけに穴をつないで、くり抜くと、「やっとできた！」と、子どもの顔には達成感の表情がみえてとれた。

次の作業は、くり抜いたラインをノコヤスリで滑らかにする作業である。これも力と根気のいる作業である。午前中の作業はここまでで、昼食休憩に入った。

午後からは、くり抜いたラインをさらに丸のみを使って削り、くり抜いた面積をより広げる作業である。少しでも面積を広げると、音が大きく響くからである。子どもたちは丸のみを使うのは初めてであり、中澤は、のみの持ち方、金づちの持ち方、動かし方をまず丁寧に教え、実演し

てみせる。

丸のみで削る作業が終わると、次は、表板と裏板を自分の形に切る作業に入る。表板と裏板を両面テープで貼り、その上に型紙を置いて、サインペンで輪郭を取る。表板と裏板2枚同時に、糸のこぎりで切っていくのである。表板と裏板を糸のこぎりで切り終わったら、表板を胴板にボンドで接着する(写真⑤)。ボンドを塗った胴板と表板を固定するために、隙間なく「押さえばさみ」で表板と胴板をはさみ、一時間ほど置いて乾かす(写真⑥)。



写真⑤ くりぬいた胴板にボンドを塗る



写真⑥ 「押さえばさみ」で表板と胴板をはさみ、固定する

夕食後は、押さえばさみを外し、力木(ちからぎ)というバンドーラの音の響きに重要な役割を果たす角材の細長い棒を2本取り付ける。まず、子どもたちは、それぞれのバンドーラの形に合わせて力木に中澤がしるしをつけたところをのこぎりで切り落とす。そして、中澤がしるしをつけたところに置き、ボンドを塗って貼る。2本の力木が表板に密着するようにコンクリートブロックを乗せ、重しにして、力木が浮かないよう圧力をかけて一晩おく。

### (3) 3日目～サウンドホールを開け、さおを接合する～

3日目午前8時半、まだ眠そうな子どもに「眠いけどがんばろう！」と中澤が元気に声をかけ、作業が始まる。まず最初の作業は、昨晚接着した胴板と表板の境目や段差をなくし、一体化させるように、ノコヤスリで削ることである。工作室には熱気が立ち込め、子どもたちは一心不乱にノコヤスリを使って削り始める。力と根気のいる地道な作業である。

続いて以下の作業に入る。

- ① 2本の力木の両端を、平のみでなだらかに削る。
- ② 力木の上部をかんなで削り、山型にする。
- ③ キリを使ってサウンドホールの穴を開ける。
- ④ ヘッドの余分な個所をのこぎりで切り落とす。
- ⑤ 自分のデザインになるように、ヘッドの形を糸のこぎりで成形する。

夕食の後は、いよいよさおを胴体に接合する作業である。さおの差込口をのこぎりと糸のこぎりでコの字型に切り、その溝にボンドを塗り、中澤のところへ持って行く。中澤は、さおと胴部



写真⑦ さおを差し込み、固定する

の接合部分にガンタッカー（大きなホッチキス）を打ち込む。こうしてさおと胴部を固定し、一晩置く（写真⑦）。さおが接合されると、バンドーラの楽器そのものの形が出現する。目に見えて楽器らしくなり、子どもたちはぐっと完成形に近づいたことを実感できる。

(4) 4日目～色塗り、ニス塗り、指板作り～

作業は4日目に入り、いよいよ大詰めを迎

える。昨晚中澤は全員分のバンドーラを持ち帰り、裏板を接着していた。早速、子どもたちは、裏板と胴板の段差をなくし一体化させるように、ノコヤスリで削る。中澤のOKが出たら、100番（粗目）の紙やすりで、全体をみがく。さらに240番（細かい目）紙やすりで、全体がすべすべになるよう、徹底的にやすりがけをする。やすりがけは、頑張った分だけ成果が目に見え、子どもたちにとってもやりがいのある工程の一つである。

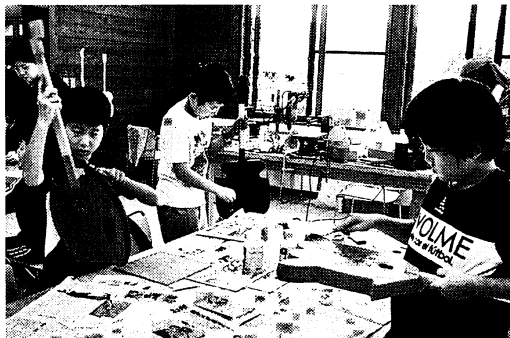
それが終わったら、いよいよ色塗りである（写真⑧）。中澤は、説明しながら瓶に入った黄色、オレンジ、赤の三色の塗料をハケを使って塗ってみせる。「木目に沿って色のうすい方から塗ります。液が垂れないよう、内側から外側へ向かって、少しづつ」。塗り終わったら、昼食休憩の間に乾かす。

昼食後はニス塗りである（写真⑨）。ほとんどの子どもたちにとって、ニス塗りは初体験である。中澤は、「内側からうすく塗ります。乾いては塗り、塗っては乾かす。厚く塗ると乾きが悪いです。何度も塗ることでつやが出てきます」と説明しながら、実際にハケで塗って見せる。塗っては外に出て乾かし、乾かしては塗る作業が一時間半ほど続いた。塗れば塗るほどつやつや、ピカピカになり、重厚感が増していくのを実感できる、楽しい作業である。

ニスを塗り終わると、指板作りである。指板作りでは、細長い板に金づちでフレット（金属の



写真⑧ 色塗り

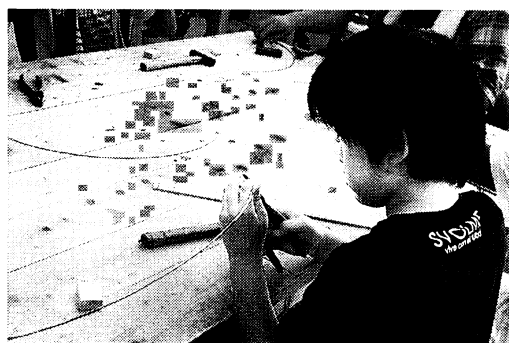


写真⑨ ニス塗り

細い線)を打ち込む(写真⑩)。このフレットの打ち込みは、ドレミファソラシドの音程を決定するきわめて重要な作業である。指板に適切な間隔でフレットを打ち込むために、中澤によってそれを打ち込む溝が指板にすでに刻まれている。

この日の晩は、バーベキューの夕食後に、中澤のもとで楽器作りと合奏を学ぶ木曾郡の市民サークル「小森林の会」によるバンドーラ演奏が行われた(写真⑪)。平均年齢70才を越えるメンバーの演奏を、子どもたちは食い入るように見つめ、聞き入った。その眼差しには、自分たちが今、必死になって作っている楽器を作り、演奏している人たちへの敬意がこもっていた。「すごい…こんな音が出るんだ！ 完成したら自分たちもこんなふうに演奏ができるんだ！」子どもたちの期待は否が応にも高まる。完成を明日に控えた子どもたちにとって、とても良い動機づけになった。

約1時間の演奏会の後も作業は続く。夕食前に開けたチューナーの穴に金具をネジで取り付け、指板をさおにボンドで貼り、ビニールテープで巻いて固定する。明日の朝にはボンドが乾いているはずだ。作業は22時過ぎまで続いた。



写真⑩ 指板にフレットを打ち込む



写真⑪ 市民サークル「小森林の会」によるバンドーラ演奏

#### (5) 5日目(最終日)～弦張り、そして完成へ、みんなで合奏～

中澤は昨晚も、子どもたち全員のバンドーラを持ち帰り、なんとか今日中に完成できるよう、細かな作業や細工を施していた。早速、子どもたちは以下の作業に入る。

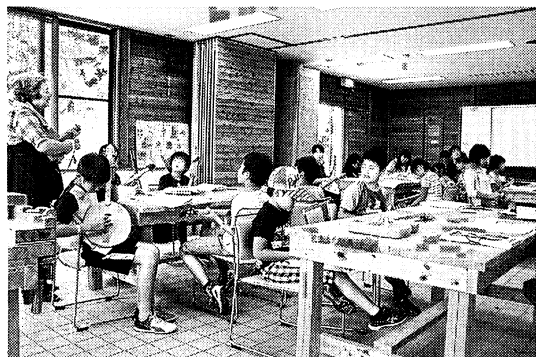
①それぞれのバンドーラの下部の位置に合わせて、弦を張る金属板の大きさを決め、カットする。

②中澤が金属板に開ける穴の位置に、サインペンで印をつけ、垂直ドリルで6か所、穴を開ける。

③胴板の下に金属板をつけ、ヘッドに糸巻きの金具を取り付ける。

④弦を張って完成。

4本の弦はそれぞれ太さが異なり、それぞれの位置に、糸巻きに内側から外側へ張らなければ



写真⑫ バンドーラが完成

ならない。が、位置を間違えたり、逆に張ったり、四苦八苦する子どもが続出した。引率の教師、サポートの学生、筆者も総出で手伝う。弦を張ったら、中央にコマを立て、調弦をする。これは中澤が調弦器を用いて一人一人行う。

やっと完成である（写真⑫）。「よっしゃー！これで弾ける！！」中澤はガッツポーズをし、子どものように喜んだ。中澤が作成

したバンドーラ演奏用の楽譜が全員に配られる。これは、楽譜が読めなくても弾けるように工夫されたものである。「腰骨を立てて、イスに浅く腰掛けます。バンドーラを自分のお腹にくるように持ちます」。中澤は弾く姿勢やバンドーラの持ち方を説明し、開放弦をピックで弾いて音を鳴らしてみせる。中澤に続いて、子どもたちも弾く。子どもたちは、「自分の楽器で弾けてうれしい」、「きれいな音が出てうれしかった」、「完ぺきに弾けるようになりたい」と目を輝かせた。中澤は楽譜の見方を説明し、基本練習を何度か繰り返した。続いて、いよいよ曲の演奏に入る。あっという間に「かえるの歌」や「キラキラ星」など数曲を皆で演奏することができた。子どもたちの習得の早さに驚かされる。

### Ⅲ バンドーラ作りと合奏の特徴と教育的意義

弦楽器バンドーラ作りと合奏の活動の教育的意義として、以下の4点を挙げることができる。

#### (1) さまざまな工具・道具を使って作る楽しさ

多くの子どもが、「このような体験はしたことがない」「初めての体験だった」と記すように、日本の小学校では、子どもたちが様々な道具を用いて本格的なモノを作る機会は極めて少ない。図画工作で用いる道具や工具の多くは、はさみ、のり、水彩絵の具、粘土、小刀などである。小学校学習指導要領「図画工作」<sup>6</sup>において、「のこぎり」や「金づち」が、第3学年及び第4学年で取り扱うべき工具として挙げられているが、近年では使ったことがない子どもが増えている。

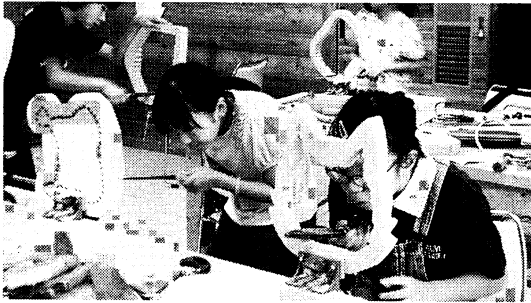
すでに述べてきたように、バンドーラ作りは、のこぎりはもとより、切る際に板が動かないよう固定する「クランプ」や、胴板の側面をなめらかにするための「ノコヤスリ」、胴板を固定する「万力」、「のみ（丸のみ、平のみ）」や「糸のこぎり」、「電動ドリル」など、多種多様な工具や道具を使って完成させる。なかでも「のこぎり」と「ノコヤスリ」はバンドーラを作るにあたって、折に触れて使う必須の工具である。それゆえ、この二つについて述べたい。まず一つ目は



「のこぎり」である。

バンドーラ作りはまず、のこぎりで分厚い板を切ることから始まる。自分のデザインした形になるようのこぎりで切るこの作業は、力のいるかなり大変な作業である。形が複雑な場合は、直線をうまく組み合わせて、余分な個所を切り落とさなければならず、工夫と試行錯誤が求められる。子どもは考えながら線を引き、力を入れてのこぎりを引く。それだけに切れたときには「やっと切れた！」と声上がる。

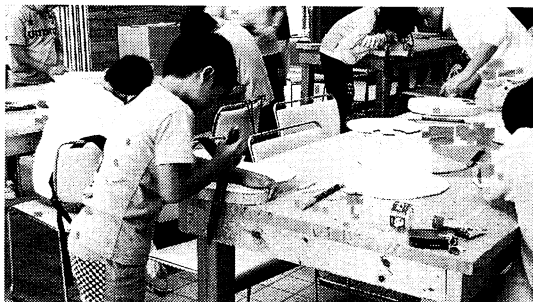
胴板に穴を開け、中をくり抜く作業でものこぎりを使う。この時には、「廻しのこぎり」を使い、穴をつないで中をくり抜く（写真⑬）。子どもたちは一心不乱に廻しのこぎりを動かすが、



写真⑬ 「廻しのこぎり」(左)と、「ノコヤスリ」(右)を使って切り、削る

根気がいる作業のため、「指がつかれた」「手の筋肉を使って、たいへんだった」「うでがわりそうになった」と、集中力が途切れ、作業の手はたびたび止まる。穴をつないで、やっとくり抜くと、「とうとう切れた！」。子どもたちは一様に満足の表情が浮かべた。

二つ目は「ノコヤスリ」である。「ノコヤスリ」を使うのは全員が初めてである。ノコヤスリは、木のデコボコを削り、滑らかにするための工具であるが、力を入れるとどんどん削れ、平らにすることができ、爽快である（写真⑭）。しかし、この作業は腕と肩の力や根気がいるため、ある子どもは、「ノコヤスリをつかう時に、なかなかきれいにならなくてむずかしかった」、「厚い板をけずるのは大変で、うでがパンパンに痛くなってくじけそうになった」と、その苦労を記す。



写真⑭ 「ノコヤスリ」を使って、側面のデコボコを削る

「さまざまな道具を使いましたが、使ってみてどんな感じがしましたか」との筆者の質問に対し、多くの子どもは、「普段使えない道具が使えて楽しかった」、「一つ一つの作業がとても大変ですごく楽しかった」と答えた。道具や工具を使って作ることの教育的な意義の一つは、子どもがさまざまな道具・工具を器用に使いこなす能力を身につけるだけでなく、さまざまな道具を使って、自分の思い通りの形ができあがっていく「楽しさ」を子どもが実感できることである。

## (2) 自分がデザインした本格的な楽器と合奏は、子どもに深い「達成感」や「充実感」、「感激」を与える

すでに述べたように、バンドーラは、本体を自分が好きな形にデザインできるのが特徴である。子どもたちは、かめ、てんとう虫、ねこ、トトロ、船、えんぴつ、ロケット、クローバーなど、大人が思いもつかない自由な発想で、多彩な形をそれぞれデザインした。子どもはバンドーラ作りで最も楽しかったことの一つに「形をきめるとき、わくわくした」として、自分の好きな形をデザインしたことを挙げた。

自分でデザインを決め、世界に一つしかない自分だけの楽器を作ることは、子どもの成長に次のような力を発揮する。一つ目は、子どもの自我の育成に大きく寄与することである。確かに小学校の図工や家庭科の時間では、工作をしたり、エプロンや小物を作る機会も多い。しかし多くの場合、「工作キット」や型紙などを用いて、皆一律に同じものを作ることも多い。しかし、それでは子どもの心は満たされない。シュタイナー学校の創設者、ルドルフ・シュタイナー(Rudolf Steiner 1861-1925)によれば、子どもは9歳ごろを境に、「自我」や「自意識」が著しく成長し始める。自分を強く意識し始める4年生以降の子どもは、「人とは違って、自分はこうしたい！」との思いを強く持つがゆえに、子どもたちは、それが満たされた時の喜びを次のように表現する。「はじめて自分で楽器が作れた」「自分のバンドーラが作れてうれしい」「自分のもので弾けてうれしい」。

二つ目は、バンドーラ作りと合奏が、子どもに深い「達成感」や「充実感」、「感激」をもたらすことである。子どもたちは、「達成感」や「充実感」および心の「感激」をさまざまな言葉で言い表す。ある子は、「いよいよ出来あがったバンドーラを手にしたときは、“今まで苦勞してきたかいがあったな”と思いました」と記す。またある子どもは、「自分のバンドーラからきれいな音が出たときは、今までの苦勞も吹き飛ぶほどうれしかった」、「むずかしい作業をやって作った自分のバンドーラは私の宝物です」と記すが、この、他の活動では味わえない「感激」や「達成感」は、言い換えると「誇れる私の形成」すなわち「一生懸命やれば、自分にもできるんだ！」という「自己肯定感」である。内閣府による「平成26年版 子ども・若者白書」によると、日本の子どもたちの「自己肯定感」や「自尊感情」は、諸外国に比べて著しく低い<sup>7</sup>。時間をかけて努力し、多くの困難や苦勞を乗り越えて作り上げた自作の弦楽器を弾くことによって沸き起こる深い「達成感」や「充実感」および「感激」は、子どもの「自己肯定感」や「自尊感情」の育成に大きな力を発揮するのである。

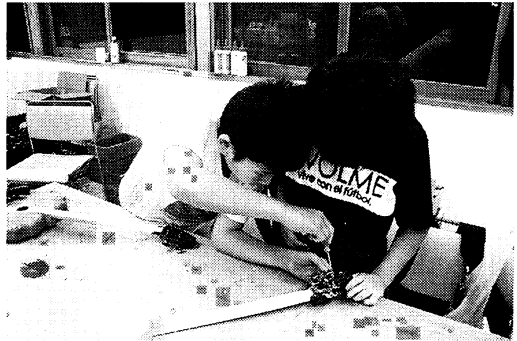
## (3) 助け合い、協力する心を育てる

バンドーラ作りのすぐれた点は、この制作に取り組む子どもたちのうちに、他人を思いやり、お互い助け合う心が育つことである<sup>8</sup>。随所で「こっつてどうやるの?」と、互いに教え合いながら、

作業を進めていく子どもたちの姿が見られたが、子どもたちは、バンドーラ作りで最も楽しかったことの一つに、「友達と協力して作ること」を挙げた（写真⑮）。たとえば、ネジを取り付ける作業は、ねじ回しを使うときの力の加減やコツが必要であり、うまくできない子どもには、うまくできた子どもが自然と手助けをする（写真⑯）。



写真⑮ 3人で協力して、駒をのこぎりで切る



写真⑯ ネジの取り付けを手助けする

糸のこぎりでヘッドの輪郭を切り出すとき、板を切り進める子どもと、オン・オフのスイッチを押して板を支える子ども、というふうによりで助け合いながら作業をしている子どももある（写真⑰）。あらゆる工程において、子どもたちはその都度、中澤のところに見せに行き、OKが出たら、次の作業に進むことができる。それゆえ中澤のもとに、ときには順番待ちの長い列ができた。その際には、上級生の6年生が4年生を優先したり、譲り合う姿も見られた。



写真⑰ 協力して糸のこぎりでヘッドを切る

言うまでもなく、助け合う心の育成は、道徳教育の重要な課題の一つである。しかし単に副読本や資料を読み、話し合うだけでは、助け合う心の育成は難しい。その心を育てるには、「協力」「助け合い」といった言葉だけではなく、実際的な行為の体験が取り入れられなくてはならない。

#### (4) 子どもとの厚い信頼関係を築く

中澤は、誰一人脱落することなく、全員がバンドーラを完成させ、達成感を得させることへと導いた<sup>9</sup>。集団での活動において、こうしたことを実現するのは決して容易なことではない。それを可能にした理由を、以下3つの観点から明らかにしたい。

その一は、中澤が、子どもがさまざまな工具や道具を適切に使いこなすことができるように実演させてみせていることである（写真⑱）。中澤は使用する前に必ず、工具や道具の特徴と使い方



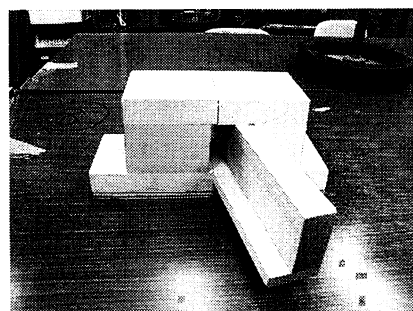
写真⑱ 「ノコヤスリ」の使い方を実演する中澤

を子どもたちの前で説明しながら、実際に使ってみせる。そして、子どもたちが使用する際には、注意深く見守り、必要であれば手助けをする。



写真⑲ のこぎりの使い方をサポートする中澤

たとえばのこぎりの場合、初めて手にする子どもも少なくない。「のこぎりは引くときに力を入れるんだよ」、「おへそで（おなかに力を入れて、筆者注）切ろう、手ではなく」という中澤のサポートを受け、子どもはすぐにコツを覚え、上手にのこぎりを使いこなす（写真⑲）。中澤のこうした実践を支えるのは、彼の次のような子ども観である。「どんな子どもも適切な助言と時間をかければ、想像以上の力を発揮することができる」。その言葉通り、子どもは、大人の適切な助言と手助けを受けて、驚くような速さで次々と技術を習得していった



写真⑳ 中澤が考案した道具

のである。

バンドーラ作りでは、中澤が考案した独自のさまざまな道具や工具が登場する。いずれも、子どもが楽に作業を進めることができるよう、子どものことを考えて工夫が凝らされたものばかりである。写真⑳は、その内の一つである。ヘッドとさおの先端をのこぎりで斜めに切り、ボンドで接合する作業があるが、さおの先端を、きれいに斜めに切るのは容易ではない。ゆがんだり曲がったりすることも多い。そこで中澤が独自に考案したこの道具

を使うと、きれいに斜めに切ることができる。

その二は、中澤が、随所で子どもたちと共同作業を行っていることである。子どもの技術の習得は速いとはいえ、電動ドリルや糸のこぎりなど、子どもが一人で使いこなすには難しい道具もある。たとえば胴板をくり抜く作業では、まず電動ドリルで穴を開けていく。子どもは中澤のもとで穴を開けていくのだが、注目すべきは、子どもが電動ドリルのレバーをそのまま下に下ろせば穴が開くように、中澤が胴板を少しずつ動かしながら穴を開ける位置に置くという、配慮と手助けを行っていることである（写真㉑）。二人が呼吸を合わせて行ういわば中澤との共同作業で

あり、子どもも安心して作業をすることができる。

子どもが一人でやるには難しい作業だが、中澤の適切なサポートによって、子どもが持っている力を最大限に引き出し、その力を最大限に生かすのである。



写真㉑ 中澤と共に電動ドリルで穴を開ける

その三は、中澤が子どもをよく観察し、適切な言葉かけを行っていることである。周知

のように、子どもは自分を愛してくれる大人の言うことには耳を傾け、意欲を示し、大人が驚くほどの力を発揮する。中澤は、たとえばサウンドホールやヘッドのデザインに悩む子どもには、「じゃあ丸にする？三角にする？ひし形にする？」と声かけを行いながら、子どもの希望する形を聞き出し、その場で具体的な形を決め提示していった。失敗して落ち込む子どもには、「失敗してもいいんだよ。完ぺきではないところが、手作りらしさなんだよ」と励ました。「中澤先生は、朝早くから夜遅くまで、優しくていねいに指導してくださった」との子どもの声が示すように、いつしか子どもたちは、中澤に尊敬の念を寄せるようになっていった。それだけではない、工具や道具を自在に使いこなす中澤の手さばきと技術は熟練の職人そのものである。「この先生はすごい！」子どもたちは、確かな技術を持ち、バンドーラの制作・完成へと導く中澤に全幅の信頼を寄せ、尊敬の眼差しで見つめたのである。

上に述べたことから、的確な助言・アドバイスを行いながら、実際の行為をもって子どもたちを手助けし、子どもたちの力を引き出し生かすことによって、中澤は子どもとの厚い信頼関係を築いていったことがわかる。周知のように、学級崩壊や教師への暴力などの背景にあるのは、子どもの教師に対する信頼関係の欠如、欠落である。中澤の子どもに対する働きかけは、どうしたら教師と子どもの信頼関係を築くことができるのか、という重要な問いに対する大きなヒントを与えてくれる。

## 結び

以上、福島県の小学生たちが、長野県・木祖村の「こだまの森」で得た“実際的な体験”すなわち“弦楽器作りと合奏”がどのようなものであるかを明らかにし、それがどのような教育的意義を持つかを明らかにした。その教育的意義は、上述したように、道具・工具を使ってモノを作る楽しさ、苦労した後を得る深い達成感、感激、友人との助け合いおよび子どもと教師の厚い信頼関係の構築などにある。これらのなかで、深い達成感や感激は、特筆に値しよう。というのは今日、多くの子どもたちが、深い達成感や大きな感激から遠ざけられているからである。また、

達成感や感激は、子どもの「自己肯定感」や「自信」を育み、さらに新しいことに挑戦し取り組みようとする意欲をもたらすからである<sup>10</sup>。

冒頭の「はじめに」で述べたように、近年における教育方法の特色として、DVDやタブレット端末などの情報機器の頻繁な使用が挙げられるが、これは映像や画像づけの事態を意味する。言い換えれば子どもの原体験や直接体験を奪い、間接体験や疑似体験による学びが主流になっているということである。この事態の中で問題なのは、子どもが大きな達成感や深い感激が得られないことである。たしかに画面や映像による学びにおいても、達成感や感激を得ることはできる。しかしそのようにして得たものは、表面的で薄っぺらい達成感や感激である。

深く大きな達成感や感激を得るには、時間をかけ苦労や困難を乗り越えて全身を使って作品を完成させる学びの実際の体験がぜひとも必要である。これは、深い大きな達成感や感激のための鉄則と言ってよいものだが、「弦楽器作りと合奏」という実際の体験は、この鉄則に従ったすぐれた教育方法であり、注目に値する、子どものための見事な学習方法である。

なお、「弦楽器作りと合奏」は、「図工」と「音楽」を統合した新しい教育方法・実践であり、わが国の教育界に新風を吹き込むものということができる。このことについては、稿を改めて論じたい。

#### 付記

バンドーラ制作に参加した福島県川俣町立山木屋小学校4～6年生15名(2016年8月8日～12日)に、「バンドーラ作りを終えて」というテーマで、感想を書いてもらった。質問項目として「バンドーラ作りで最も楽しかったのは、どんなときでしたか」、「バンドーラ作りで最も難しかったところはどこでしたか」、「バンドーラが完成したとき、どのような思いを持ちましたか」などを挙げ、自由記述欄を設けた。本文中の子どもたちの感想や意見は、そのなかでも注目すべきものを取り上げて記したものである。

なお、本研究は、平成28年度梅光学院学術研究助成による成果の一部である。

#### 引用・参考文献

- Heinrich Pestalozzi, *Lienhard und Gertrud*, in E.Bosshart, E.Dejung, L.Kempton, H.Stettbacher [Hrsg.], *Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke in zehn Bänden*, Zweiter Band, 1945.
- 広瀬俊雄監修、藤林富郎、池内耕作、広瀬綾子、広瀬悠三『感激の教育』昭和堂、2012年。
- いわき民放(2015年2月17日付夕刊)「ユネスコ作文コンクール、いわき市長賞千葉さんの作品」(いわきユネスコ協会が市内の小学5・6年生、中学生を対象に行っている2015年度の作文コンクールでは、バンドーラ制作と合奏の実習会に参加したいわき市立四倉小学校6年千葉奈央さんの作文「バンドーラがつなぐ思い」が、いわきユネスコ2015年度作文コンクール最優秀賞・いわき市長賞に選ばれた。)
- 文部科学省「小学校学習指導要領」平成20年3月告示、平成27年一部改正。
- 内閣府「平成26年版 子ども・若者白書」平成26年。

- J.-J. ルソー著、今野一雄訳『エミール（上）』岩波文庫、2012年。
- 世界教育宝典全集『ペスタロッチ全集』（第四巻）玉川大学出版部、昭和40年。

注

- 1 Vgl. Heinrich Pestalozzi, *Lienhard und Gertrud*, in E.Bosshart, E.Dejung, L.Kempton, H.Stettbacher [Hrsg.], *Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke in zehn Bänden, Zweiter Band*, 1945, S.57, 世界教育宝典全集『ペスタロッチ全集』（第四巻）玉川大学出版部、昭和40年、305頁。
- 2 J.-J. ルソー著、今野一雄訳『エミール（上）』岩波文庫、2012年、423頁。
- 3 J.-J. ルソー著、今野一雄訳『エミール（上）』岩波文庫、2012年、474頁。
- 4 市民タイムス木曾、平成28年8月12日付。
- 5 文部科学省編「心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開—小学校—」2002年、89頁。
- 6 文部科学省「小学校学習指導要領」第2章第7節 図画工作、平成20年3月告示、平成27年一部改正。

材料や用具については、次のとおり取り扱うこととし、必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりすること。

ア 第1学年及び第2学年においては、土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類など身近で扱いやすいものを用いることとし、児童がこれらに十分に慣れることができるようにすること。

イ 第3学年及び第4学年においては、木切れ、板材、釘（くぎ）、水彩絵の具、小刀、使いやすいのこぎり、金づちなどを用いることとし、児童がこれらを適切に扱うことができるようにすること。

ウ 第5学年及び第6学年においては、針金、糸のこぎりなどを用いることとし、児童が表現方法に応じてこれらを活用できるようにすること。

- 7 内閣府「平成26年版 子ども・若者白書」平成26年、79頁。
- 8 広瀬俊雄監修、藤林富郎、池内耕作、広瀬綾子、広瀬悠三『感激の教育』昭和堂、2012年、46頁。
- 9 バンドーラを完成させるには、通常36～40時間を必要とする。
- 10 ある子どもは、中澤や木曾ユネスコ協会に対する感謝の気持ちを表すと同時に、「今度は私たちが、福島や他の困っている人たちのために力を尽くせる大人になりたい」と述べた。